事業報告

平成11年度
公開講座概要

総合研究所が担当する平成11年度公開講座は、文化講座、社会学部公開講座、桜井市生涯学習シリーズ奈良大学教養講座、都祁村生涯学習シリーズ奈良大学教養講座の四講座を、前年に引き続き開催した。

近畿文化会と共催の文化講座は20年目を数え、「まちをつくる・まちをまもるー世界文化遺産のあるまち・奈良ー」をテーマに開催、受講申し込み者は、204名で、全5回の講座に、延べ752名の受講があった。桜井市、都祁村の教養講座は、それぞれの教育委員会との共催で実施、地元の希望を尊重し、地域に密着したテーマを中心に開催した。桜井市教養講座では、110名の申し込みで、延べ358名が受講し、都祁村教養講座には52名の申し込みで、139名の受講があった。

また、12回目の社会学部公開講座は、「現代社会におけるこころの「癒し」を求めてー21世紀の成熟社会の課題と展望ー」をテーマに開催し、91名の聴講があった。

桜井市生涯学習シリーズ
奈良大学教養講座

私たちのまわりに目を向けよう
― 郷土を学び新しい時代を知る ―

6月6日　『おくのほそ道』の板木をめぐって

永井一彰

旅の俳人として有名な芭蕉は、数篇の紀行文を残している。とりわけ、その晩年に全精力を注いで完成した『おくのほそ道』は、芭蕉の高潮した文学精神を表現した作品として高く評価され、三百年の長きにわたって読み継がれ、国民的文学としての地位をゆるぎないものとしてきた。紀行文『おくのほそ道』に描かれる芭蕉の旅は、いかにもドラマチックである。

ところで、昨年、奈良大学へ一括納入された約五百枚の板木の中から出現した『おくのほそ道』の板木も、それが刻まれてから奈良大学に落ち着くまでの二百年間の旅路を辿ってみると、そこにはまた別のドラマが展開していたことが知られる。

度々の焼失・消滅の危機を奇跡的にくぐりぬけ、『おくのほそ道』出版の秘密を語るべく、いま私たちの前に姿を現した一枚の板木の旅路を辿ってみることにしよう。

6月20日　倭国女王卑彌呼・台与と崇神天皇

水　野　正　好

中国の『三国志』－魏志倭人伝には、2～3世紀、日本を統治する倭国王に帥升・卑彌呼・台与という男－女－女帝の王統譜が記されている。この倭国王の宮都－邪馬台国は諸説があるが、私は大和国大倭郷－天理市と考えている。広壮な王宮の位置には後に大和神社が創祀されると考えるのである。景初三年、女王卑彌呼は魏の少帝のもとに遣使する。少帝は倭国分と卑彌呼分を区別し、多くの文物を賜与している。錦や絹と並び銅鏡百枚が卑彌呼女王に贈られる。こうした下賜の文物中、今日までのこりうるのは銅鏡百枚のみ。この銅鏡百枚は、景初三年の銘をもつ一群の鏡－三角縁神獣鏡とする見解が大勢を占める天理市黒塚古墳はこの三角縁神獣鏡34枚を副葬していたので有名である。卑彌呼・台与女王のあと皇位を継承するのは崇神天皇であろうか。三輪山西麓に遷都、磯城瑞離宮を営む、箸墓古墳の造営が始まるのもこの時期。

7月4日　近世大和における参詣と観光

鎌　田　道　隆

奈良・大和の観光といえば、その中心は社寺参詣である。この社寺参詣というかたちをとる観光旅行のスタイルは、江戸時代の人々が考案し、庶民の間にひろく定着させてきたものである。人々の社寺参詣の道筋が大和の主要な街道となり、近代には鉄道の設置にまで進んでいる。ことに人々が自分の足で旅に出かける江戸時代の徒歩旅行では、参詣の目的地よりも、道中のいろいろな集落の民俗や文化との出会い、そして旅人と沿道の人々との触れあいこそ旅の醍醐味だったのではないだろうか。実際、大和の人々は、参詣へ出かける旅人をあたたかく接待した。道標を建て、燈籠に火を灯し、接待場を設けて湯茶の接待につとめた。接待所の運営には、地域の女性たちが金銭を出しあっている記録もある。これは、江戸時代の旅人のなかに、かなりの女性たちがまじっていたこととも、何らかの関係があるのかもしれない。

9月19日　英国庭園と児童文学

中尾真理

『秘密の花園』の主人公メアリの捜し求めた庭は、高い塀に囲まれた、誰も知らない「秘密の庭」である。お屋敷の敷地の中にある、閉ざされた花園とは、いったいどんな構造の庭なのだろうか。

壁に囲まれた整形式庭園、自然の風景をそのまま取りいれた英国式庭園など、イギリスの庭園の様子を、歴史的な考察も交えながら、児童文学の世界にたどってみる。庭という空間の持つ意味を、子供時代とのかかわりで考えてみたい。

10月3日　地球はいま

― 環境ホルモンを中心に ―

上村雄彦

最近多くの化学物質が体内のホルモンを攪乱し、生殖機能などに大きな影響を与えることがわかってきています。それらは環境ホルモンと呼ばれていますが、現在アトピー、アレルギー、ガン、奇形、生殖機能の異常、ホルモン代謝異常との関係が明らかにされています。例えば男性の精子数が年齢が若くなるほど減少し、将来子供が生まれなくなる可能性や、「キレる」、「ムカつく」という子供たちの行動異常も環境ホルモンと関係があるのです。

目を地球規模に転じてみると、オゾン層破壊による皮膚ガン、失明の増加、地球温暖化による生態系への打撃、爆発する人口による食糧危機など、地球環境問題の実態は一般に知られているよりはるかに深刻です。森林破壊や酸性雨など他の問題も含めたトータルな影響を考えあわせるとき、現在の地球はよく「氷山にぶつかったタイタニック号」だと言われています。

この講演ではこのような地球規模問題の実態を理解し、根本原因を見出し、社会のあるべき姿を探っていきます。

10月17日　ストップ・ザ、オンダンカ

― 地球温暖化と我々の日常生活様式との関わり ―

中川寿夫

地球温暖化と人口爆発や人間活動の肥大化との関わりについては、今やその因果関係が明確にされつつある。人類の繁栄が結果的にその存在基盤たる地球環境を破壊しつつある、という事実を我々は真摯に受け止めなくてはならない。「地球温暖化防止京都会議（COP 3）」における「京都議定書」の採択が「持続可能な発展」に向けての歴史的第一歩と成りうるか否かは、

我々個々人の意識改革のありよう一つに依っているとも言えるだろう。

事態は事実切迫しつつある。地球環境・生態系の保全に向けて、全ての人間は、自らの身近な周辺環境のみに留まらず、よりグローバルな地球環境という視野から事態を捉え、物事を発想し、主体的かつ迅速に行動していくことが要求されている。我々は少なくとも事態を正確に認識し、我々にとっては常識的な日常生活様式のどこが（何が）この問題と結節しているのかを理解し、可能なところから第一歩を踏み出さなくてはならない。

この講演では、地球温暖化について、そのメカニズム、現状と将来予測、社会的経済的影響、必要な対策と可能な対策等について、我々の日常生活様式との関わりを理解することに主眼を置いて、共に考えてみたい。

都祁村生涯学習シリーズ

奈良大学教養講座

生活文化を考える ― ゆとりと豊かさを求めて ―

5月9日

《大和の歴史・文化》
大和の文化財を伝える

西山要一

近年の経済の衰退、環境の悪化への反省からでしょうか、あるいは社会の成熟がもたらしたのでしょうか、文化環境への関心が高まり、文化財とは何か、文化財の保存はどうあるべきか、盛んに議論されるようになってきました。そんな中、1998年12月に〝古都奈良の文化財〟がユネスコ世界遺産に登録されました。世界の・人類の文化財として大切に保存し、研究者や観光客に見てもらうのも文化財の活用法の一つでしょう。

さて、都祁村には縄文時代の高塚遺跡、弥生時代のゼニヤクボ遺跡、古墳時代の三陵墓東古墳、奈良時代の小治田安萬侶墓、長屋王と関係ある闘鶏氷室、来迎寺などが、森や茶畑に抱かれて数多く所在していて、都祁は文化財を今に伝える里と言うことができます。古墳、お寺や神社の建物、仏像、石塔、祭りなどの文化財が、地域の日常生活のなかに息づいている、この都祁の里のありようもまた、文化財の保存と活用のひとつのモデルであると思います。

文化財を創り、育み、護ってきた強い意志とは何か、そして、どのように後世に伝えていけばよいのかについて考えます。

5月16日

《大和の歴史・文化》
都祁の社と寺と

水野正好

都祁の自然はその歴史もあって実に深い味わいをもっている。山そのものを神体として本殿をもたず拝殿を中心にまつりが行われる三輪山－大神神社、そうした祭祀の形を移した神体山中心の信仰が都祁を色こく彩っている。朝廷を支える一角、氷室の設置など、古代は吉野と並ぶ神秘的な霊こもる地域として強い独特の景観、慣行、文物を具えた地域とみられていた。太朝臣安萬侶郷墓など平城京の天皇や貴神に火葬・墳墓の地となるのも一種の「隠国」－長谷の地と相似た雰囲気を漂わせる地と見做されていたからであろう。

一方、都祁は仏をめぐる大切な地である。寺々は中世の色彩りをとどめ、一寺、一寺をめぐれば数多くの石造文化財を伝え、一躯一躰の仏もすばらしい。また、仏教行事は各時代の特色

を具えたまま今日に伝わり、また、歴史のその時その時の動きを敏感に反映している。都祁のカミ・ホトケの世界は実に趣き深いものがある。

8月8日　《人間としての生き方を考える》生涯教育の人間論

松　井　春　満

生涯教育とか生涯学習と言われる事柄は、人間の特質を明らかにする「人間学」と「人生」の歩み方という問題に実は深く関わっているはずである。

意識のある限り人間は考えたり感じたりしている。これを広義の思考というが、人によってはそれは千差万別のようでありながら、根本は幾つかの基本的な様式からのバリエーションとして成立する。世代・年齢・時代などの時間軸、文化や風土の空間軸による思考の違いなどの底にもそれは貫流している。それが一つの問題点をなす。

人生を考えるときに看過できぬ今一つのことは、人間には成長・発達の時期があると同時に、必ず衰退の時期があるということである。人生は輝きばかりではない。

前者の思考特徴も、後者の発達特徴も、生涯教育・生涯学習を考え、行うときの視野に収めていなければならない。結局それは「自然」という人為を超えた大きな流れに教育も包摂されていくということであろう。

8月15日　《人間としての生き方を考える》すこやかに暮らそう

― からだの不思議・こころの不思議 ―

小　西　正　三

健康でありたい、これはみんなの願いです。

世の中が目まぐるしく変わる中で、わたし達の体が蝕まれ、心の病むことが増えています。健康への願望もどんどんふくれあがり、新聞やテレビでは医学的情報が氾濫し、健康食品や健康器具が次々と現れてきます。

わたし達には生まれながらの自然治癒力があり、歴史・風土の中で積み重ねられた生活の知恵もあります。人間をモノと考える医学べったりの健康だけで果たしていいのでしょうか。健康でなければならないという現代人の思い込みは、むしろ病的だとさえ思われます。

老いと病は誰も避けることは出来ません。上手に年をとり、病気と仲良く生きていく、医療の考えも取り入れながら、それをこえて、日々すこやかに暮らす、そんな健康をみなさんと考えてみました。

11月14日

《環境問題》
環境ホルモンについて考える

藤原　剛

最近、精巣の異常に小さいコイや、ペニスのあるメスのイボニシなど生殖器に異常を持った生物の報告が相次いでいる。人の場合でも、精液中の精子数が減少していることがわかっている。こうした異常は環境中に放出された、環境ホルモンと呼ばれる様々な化学物質が生物の体の中でホルモンの様に働くためと考えられている。環境ホルモンは生殖機能に悪影響を及ぼすだけに、その対策が遅れれば種の存続が危なくなる。

環境ホルモンについては、どの物質が、どのくらいの濃度で働くのかなどまだよくわからない点も多いが、発ガン性などに比べてはるかに低い濃度で働く特徴があり、対策は難しい。それだけにわれわれは環境ホルモンについて、関心を持ち、自らを守るために十分注意することが必要である。

ここでは環境ホルモンとはどういうものかを解説し、その影響や我々が取りうる対策について考えた。

11月28日

《環境問題》
奈良の河川の自然環境と河川改修
― より多くの生物と共存できる川をめざして ―

岩崎敬二

私たちの心をなごませ、魚釣りや虫取りへの欲望を駆り立てる美しい川辺の景観が、この数十年のあいだに次々と失われてきました。現在では、コンクリートで固められたまっすぐな堤防が、無粋なまでに私達と水辺とを遠く隔てています。

近年、これまでの人工的な川作りが見直され、「自然にやさしい川作り」が行われ始めています。「多自然型川作り」という新しいタイプの土木・造園工事です。川辺に植物を植え、コンクリート製の護岸を石垣に変え、巨石を配して瀬や淵を作る等々によって、失われた自然の復元を目的としたものです。

豊かな風土と歴史に恵まれた奈良の河川でも、「多自然型川作り」が県によって進められていますが、まだまだ問題点の多い事業です。この講演では、都祁村を流れる河川の自然と生物の現状を報告しながら、いかにして自然の多様性を復元し、家族で遊べる川を作り上げ、人間にとって好ましい水辺環境を管理していくかをお話ししました。

奈良大学文化講座

大和の山々 ― その歴史・文学・自然 ―

9月18日　国民越智(おち)氏と高取詰城

松山　宏

越智氏は大和源氏の子孫といわれ、中世は興福寺の被官として高市郡を中心に勢力を振った有力国人である。地域が大和南部のこともあって奈良から離れ、多くの場合反主流派の姿勢をとり続けた。

南北朝時代には南朝に属し、室町時代には北部の国人＝衆徒筒井氏と勢力を競った。管領畠山氏と結ぶが、それも反主流派の義就と行動を共にし、後南朝を支え、応仁大乱には西軍に属した。戦国時代には大名の如き勢いをみせたこともあり、本拠の越智館には城下町も形成されていたようである。しかし外部勢力の侵入により、それとの対抗の中で勢力を失い、最後は亡んだ。

ところで戦国時代には戦乱が續くため平生の居館の他に決戦の城として詰の城を持った。越智氏には二つあり、一つは本拠地の東北一粁にある貝吹城、もう一つは東南六粁の高取城である。始めは前者がよく利用されたが後には後者が重視された。近世にかかるが、現在高取城跡には美事な石垣が残っている。

9月25日　平安和歌と大和の山

滝川幸司

平安京という都市で作られた文学作品に大和の山を見出すことは、それほど困難ではない。和歌に限っても、吉野・佐保・初瀬・竜田など、多くの山を歌人たちは詠んでいる。それらは『万葉集』にも見られるように、上代人が愛し詠んだ場でもある。しかし、だからといって、平安人にとっての大和の地が、上代人と同じように受け取られていたわけではない。平安人の基盤は京都なのだから、当然といえる。では、彼・彼女たちは、どのように大和の山を認識していたのだろうか。

例えば、吉野山は『万葉集』では、川の吉野として詠まれる。それが、平安和歌を見ると、隔絶した異境の地、隠遁の地と表現され、われわれにも親しい、桜の吉野となっていく。また、佐保山は春のイメージであったものが、秋の紅葉の名所とされる。他の山でも同じようなことが見られるが、こうした相違を具体的にたどりつつ、平安人にとっての大和の山の姿を探っていきたい。

10月9日　坪内逍遥「役の行者」と行者伝説

浅田　隆

奈良県の南部には1500メートルを越える山々に支配された山岳地帯が広がっている。十津川水系と北山川水系に挟まれた大峰山系だ。この大峰山系には、科学が驚異的発達を遂げた20世紀が終わろうとしている今日においてもなお、「奥駆け修験」と呼ばれる激しい修行をする宗教が息づいている。吉野山蔵王権現から那智山までの180キロメートルを駆け抜ける修行。古代日本人の自然崇拝と大陸渡来の仏教が習合して成立した。ミステリアスな信仰形態だ。この修行場の開祖とされているのが役の行者。

様々な伝説で色揚げされた役の行者を、壮大な戯曲に仕上げたのが坪内逍遥である。講座では戯曲の「役の行者」とその背景の伝説を紹介するとともに、奈良県下に散在している役の行者に関連する場所をスライドで鑑賞していただき、奈良の自然の美しさ・素晴らしさを味わっていただきたいと考えている。

10月16日　「多武峰縁起絵巻」について

塩出　貴美子

桜井市多武峰に鎮座する談山神社は、藤原鎌足を祀る社であり、大職冠社、多武峯社とも称された。この談山神社には「多武峰縁起」という四巻の絵巻が伝えられている。その内容は藤原鎌足の生涯と、ここに墓所を営むまでの経緯、また本山の聖霊院に祀られている神像（鎌足尊影）の破裂と山上鳴動のことなどである。

しかし、本絵巻は「絵巻」として見るには、構成上いくつか不可解な特質を持っていると言わざるを得ない。また、現存するのは江戸時代初期に描かれた作品であるが、その原本は恐らくは中世まで遡るものと思われる。

本講では、上記二点の問題に留意しながら「多武峰縁起」をスライドで鑑賞し、本絵巻の画面を通じて、その本来の姿を推定することにしたい。

10月23日　大和の山－その生いたちと環境

池田　碩

大和は海に接しない内陸地域に位置し、中心部の盆地とそれを取りまく周囲の山々から構成されている。盆地は東西約20km、南北約30kmのほぼ長方形状で、北部の京都盆地と対峙している。

今回は、盆地とその周囲の山地を中心に、その生いたちと環境について考えてみよう。

周囲の山々といえど、その形状をみると一様ではない。西方は南北に細長い生駒山地であり、東方は面的な広がりを示す大和高原である。そして北方の山は、標高の低い佐保丘陵であるように、それぞれちがいを示し、環境も自ずと相異する。

さらに、これらの山地や盆地を含めた大和全体の地体構造からは、近畿トライアングルの中心部に位置し、およそ120万年前ごろから始まった東西圧縮運動によって、現在の山地に当る部分は隆起し、一方盆地に当る部分は沈降してきた地域である。この運動は特に30万年前ごろから急速に進み、ほぼ現在見られる地形の概形を作った。

このため、佐保丘陵を形成している地層（大阪層群の砂レキ層）と同じものが、西方の大阪湾では湾底に埋没しているのに対し、東方では大和高原上をおおっている。このような構造運動は現在も継続しており、今後も大和の地形はゆっくりと変化していくことが想定される。

このような構造運動の中に'95年１月17日に発生した阪神大地震のような事件（地変）を位置づけたら、大和ではどのような状況が生じるのかについても、神戸周辺の地形と比較しつつ考えてみる。

平成11年度　奈良大学社会学部公開講座報告

共通テーマ「現代社会におけるこころの「癒し」を求めて－21世紀の成熟社会への課題と展望－」

第１回　平成11年9月11日(土)13：30－16：00　於：奈良県中小企業会館
心理学の視点より
　サブテーマ「震災からひろがる市民活動・ボランティア」
　講師：震災しみん情報室代表　実吉　　威
　　奈良大学社会学部助手　八ツ塚一郎

第１回目は、心理学の視点から震災とボランティアをテーマに開催した。学生や市民約30名の参加者のもとに活発な意見が交換された。神戸の震災しみん情報室の代表実吉氏からは、阪神淡路大震災で全国から集まったボランティア団体を支える活動の具体的な内容や苦労話が紹介された。昨年3月から同情報室を開設した歩みや実際の活動内容などはより具体性に富んだ話であった。行政に任せきりの地域づくりではこれからはやっていくことができないこと、また本当の住民主体のまちづくりを形成させていくためには、多くのNPO同士の協働が必要であることが討議された。八ツ塚助手からは、実吉氏の話題提供を分かりやすく研究的視点から取られた課題や将来的な市民活動のあり方などが紹介された。尚９月12日付けの読売新聞にその内容が掲載された。

第2回　平成11年10月9日(土)13：30－16：00　於：奈良県中小企業会館
社会福祉学の視点より
　サブテーマ「なぜ今エイプル・アートとケアのためのケアなのか！」
　講師：財団法人たんぽぽの家　森口　弘美
　　奈良大学社会学部助教授　桂　良太郎

第2回目は、社会福祉の視点から障害者の絵画等を通じて脚光を浴びようとしている「エイプル・アート」にまつわる活動紹介を通じて、21世紀の成熟社会のあり方について講座を開いた。市民や学生合わせて21名の参加者を得た。

当日は財団法人たんぽぽの家のスタッフの森口弘美さんの他に、当事者であるたんぽぽの家のメンバーの藤村時代さんも参加頂き、実際に彼女が描いた絵画等の作品を鑑賞することができた。森口さんは、「エイプル・アートには制作者に表現することの喜びと経済的自立を促し、障害や障害者に対する社会のイメージを変えながら、見る人、聴きたい人の心を癒す一連の営みである」と提案している。

奈良大学の桂より、「アートには、もう一つ大事な意味がかくされている。それは経験から生まれた技であり、英知である」と提案する。援助する側もされる側も同じ人間として心の豊かさが備わっていなければ本当の福祉にはならないと締め括る。尚10月19日付け読売新聞にその内容が掲載された。

第3回目　平成11年11月6日(土)13：30－16：00　於：奈良県中小企業会館
（文化人類学の視点より）
　サブテーマ「異文化を生きる移住者にとっての「故郷」」
　講師：国立民族学博物館　李　　仁子
　　奈良大学社会学部講師　芹沢　知広

第3回目は、文化人類学の視点からみた「こころの癒し」の問題について、韓国の済州島から日本にかつて渡ってきた人々の日本での暮らしと葬祭にまつわる死生観について、国立民族学博物館の研究員である李仁子さんをお招きして、話を伺った。学生や市民が約40名もの多くの参加者を得た。過去の歴史のなかで、日本に連れてこられた人々、また自ら日本に渡ってきた在日韓国人にとって、死後は故郷である韓国（済州島）に骨を埋めることを夢見ている人々がいることと、その実状が李仁子研究員から報告された。そして、奈良大学芹沢講師より、それらの人々にとって異国でのアイデンティティー形成のなかで日本文化や社会への適応の問題は、日本人にとってのこれからの国際交流を考えるうえでの考えなければならない視角が投げかけられていることをこの講座を通じて学ぶことができたのではないかと、締め括った。実際の済州島での葬祭のめずらしいスライドを見ながら、人間にとって「故郷」とは何なのかを考えさせられた講座であった。　（文責　桂）